

報



會

會 岳 山 本 日

23

月 二 年 八 和 昭

缺けてゐるもの

浦松佐美太郎

山に就て語られたもの、書かれたものも、もう随分の数になつてゐる。だが、見渡した所、何れも之れも同じ様な色彩が濃く目立つ。何か少し毛色の變つたものと云へば、毛色の變つてゐるだけで、さて讀んで見れば、ひどいイカサマものだつたりする。山に就て書かれること、こんなにも夥しいことは、一寸珍らしいだらう。年三回の山岳を始めとして、各學校の山岳部報、登山團體の機關誌、一般雜誌、新聞、それから所々専門雜誌なるものに至る迄、數へ擧げたら一年に何の位になるか、恐らく大したものに違ひあるまい。

それにも拘はらず、何れも之も同じ様で、何れを見ても大した變りもないのは一體どうしたことだらう。

極く少數の學問研究に屬するものを除いては、大多數の活字になつて出て来る山の文獻は、何月何日何處でどうしてといふ様な、何人かの仲間うちでは、面白い興味の盡きないものには違ひなからうが、世間多數の人には、何の役にも立たないものか。さもなくば、もう少し正確に何月何日何時何分、何處でどうして、何處の岩から何尺どつちが、どうなつてゐて何處の角を曲がけに、三つて滑んだのといふ様なゆき方である。之は主觀的登山案内記とでも、いとも難しく偉さうに定義でもして

置きませうか。

前者は、その筆者をよく知つてゐて、そして讀むなら、面白味もあらうが、そうでない人達には、何のことはない。後者は、珍らしい何とか紀行で、あれば、そのことの興味にひかれて、價値も出て來ようが、歩きふるした、ゆきふるした山道な、

山 第二十八年第一號豫告

▽本 欄

山岳文學に就いて 田部 重治
景觀描寫としての山岳寫眞 田中 薫

東郡大山塊 鹿野 忠雄
▽雜 錄 田中 薫

テイロールの冬 吉澤 一郎
マッターホルンの北壁 鈴木 岩雄

裏川と大日岳 島田 武時
春の藥師岳五色針木越 沼井鐵太郎

臺灣の山岳漫談 原 全敬
秩父とその山村

其他新刊紹介、總頁約一五〇頁
定價二圓、三月末日頃發行の豫定

尙ほ山岳次號の原稿締切は四月末日です。どしどし御投稿を御願ひします。 編輯 係

こんな調子で書かれては、それはたゞ讀みづらい案内記とでもいふ以外に法もあるまい。

此の山の案内記だが、もうこゝいらで、一つ、組織立つた、整然とした、立派に客觀性のある、案内記が出来て、いゝのではあるまいか。紀行文とも案内記ともつかない様なもの

のを、何々案内何々といふのは、もう止しにしてもいい、時分だと思ふ。多士濟々、文運隆盛な登山界のことだ、せめて何處か一地方の山塊でもいい、立派な登山案内書が、一冊位出来なくては、耻だらう。

先の紀行文に就ても、同じことが云へよう。辨當を食べたらうまかつたとか、何處で寝たら寒かつたなどといふ、小學生の遠足の作文のやうなのは、こゝらで一つ打切つて、云ひ換へれば、上ツ面の紀行文はやめにして、思ひ切つて、もつと深く山に喰ひ込んだ、深味のあるものを之れから作り上げて行つたらどうだらう。山をどう感じたか、山登りをどう考へたのか、こゝらの點をしっかりと考へて、掴み出して來ることが、非常に必要とせられてゐるのではない。山の大ききからも、深きからも、もうとつとくに限りの解つてゐる日本の山々だ。同じことを繰り返して居れば、今の様なことを續けて居れば、少しも進歩がなくなつてしまはう。ザイルをかついで、ビッケルを持つ所に新し味のあつたうちは、まだ何とかが新しさうだつたが、それも鼻について來たら、何處へゆくのだ。

今から一つ考へ直して、こつちの方へ喰ひ込んで行つたならば、それは當分の間、何處に限りがあるのか一寸見當もつくまい。日本の登山界が世界に貢獻する何物かあるならば、恐らく此の邊りから、非常に大きなものが生れ出て來さうに思はれる。此の大事なものが今の日本の登山界には、缺けてはしないか。

主要 目 次

★缺けてゐるもの

★山小屋に泊る………藤島敏男譯(二)
★山岳救難機關に就て………瀨木三雄(三)

★研究欄

1 山地スキー術私見(上)………今西錦司(四)
2 魔法瓶に就て………(五)

★圖書紹介………(六)

Alpine Journal Vol. 44, A.A.C.
E. 杣及R.C.C報告五號、東大ス

★山岳部報告、黒部立山圖幅

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

★山岳部報告、第五十八回小

山小舎に泊る

Charles Gros : Propos d'un Alpiniste 46

藤島敏男

ひとつの尾根を廻ると米河が平らにうちひらけて、その向ふに山小舎が望まれる。堆石の端の、石ばかりの中にボツと建つてゐる。風や雨に曝された小舎の壁は大分古びて錆びたトタン屋根は小舎のうしろの岩とおなじやうな色だ。窪みに獅嘴のやうに残る萬年雪が目標のやうに光つてゐる。

「誰が来るかな？」と眩しさうに手を翳して、しばらく凝視してゐたが「誰もゐないらしいぜ」といふ。

「だつて小舎はゐてゐるやうぢやないか」と、ひとりはまだ不審さうに眺めてゐる、もつともこれは雪の上かビッケルの上に座つて茶を一杯のむ口實でもあるのだが。

「いや、誰もゐやしないよ、すっかり閉まつてゐる」

小舎は空っぽで誰もゐないのだ。鑑戸も入口の戸も天窓もみんな閉まつてゐる。煙突から煙も出てゐない。ポールに旗も揚つてゐない。

「今晚誰が来るなけりや、小舎は俺達だけだよ」とひとりりが附加へた。そこでまたみんな歩きだしたが、最後の登りはいつでもいかに長いやうに感じるものだ。綱もビッケルも引摺つて、さきへ行く奴がビッケルと綱を引摺つた二本の跡の間をボツカリ／＼歩いてゆく、とき／＼肩を擦つては、大分こたえて来た荷の位

地を更えたりする。一列になつて、黙りこくつて登つてゆくが、めいめい心のうちでは、軟くなつて歩き難い雪に弱つたり、思々しがつたり、憤つたりしてゐるのだ。太陽は燦然としてます／＼強烈である。汗が流れる。玉のやうな汗が額から睫毛に流れて目に沁みる。口へ這入ると鹽辛い。上衣の襟が日に焼けた襟首に當つて痛い。とき／＼思ひ出したやうに、小舎はまだ遠いのかと日除眼鏡を外してみるが、とても眩しくつて目をあいてゐられない。まづ何もかも紫色に、それから白と黒とが目の前で躍つてゐるやうにみえる、やつとす目をあくと米河の強い陽炎を通して、高い所に黄色い堆石のそばに山小舎がみえる。日除眼鏡を掛け直す。大分登つたやうに思つてゐたが、まだいくらか来てゐない、しかし少しは近くなつてゐるのだ。「一體あと何分かかるだらう」「さあ、三十分足らずかな」

一時間はタツブリかゝることを充分承知してゐながら、つい三十分足らずだなどと思ひ込んでしまふのだが、灼きつける日光とます／＼軟かくなつた雪とが、ときに一行の元気を阻害させてしまつて、また元どほり機械的に、想ふこともなく、感ずることもなく進んでゆく。何か想つてゐるとすれば、小舎へ着いたら飲まうと考へてゐる茶のことか、晩めにあげやうと考へてゐる果物の饅頭のことかゝらゐるもの（見事なブラムや蜜のやうに甘い乾杏子は全く堪らない）、それからきのふ露あひでらんだフレッシュな飲料の想出が一行を悩ます。なにか感じてゐるとすれば、荷のめりこんできた肩のことか、流れる汗のことかゝらゐるものだ。なにもかも觀賞しない。目は雪の上におとしたきりだ。仲間間の靴が、摺つてゆく綱が、自分の靴が馬鹿みたいにみえてゐるだけだ。こんなものゝ動きから、なか／＼早く歩いてゐるぞと自ら信じてゐるのだ。眼を上げて山小舎を見直すと、稍々近くなつてさつきまでみえなかつた細部がよく分る。堆石のひとつ／＼が餘程はつきりして来た。岩が缺け落ちて米河の縁を轉がる音がきこえる。近くへ来たんだ。最後の一路張り、そして遂に來た。

米河を離れると微かな踏跡が堆石を斜めに突切つてゐる。苦しい肺臓から溜息が、でなければ元氣づけるやうな言葉が洩れる。大きな靴鉾が石に軋しむ。濡れた革に砂がいつぱい付いて誰の靴も汚ない。ビッケルが岩を打つて響く。日除眼鏡を外して大きく呼吸する。シャツの袖をウツと捲り上げる。時計をみると、中々よく踏張つたと思ふ。みんなの間隔が狭くなつて、捲いた綱を手にかけてゐる（小舎へ着いてから綱を解く氣らしい）。いよ／＼來たといふことが嬉しいんだ。

堆石を越えやうとすると、まづ小舎の屋根が、黄色い木組が、遂に小舎全體がみえた。みんなの想ひはさつま／＼だ。喋舌る、笑ふ、周囲を見廻す、躍んで花を摘む、手近かな山に想ひを馳せる、そして明日はあれに登らうとさへ目論む。山名を高距離を云々するに至る。と忽ち小舎が目前に出現した、陽を一杯に浴びてがつしりと。白っぽい壁の真中に入口だけは青色に塗つてゐる。

先頭の奴の足が速くなる。山小舎の閉切つた扉の錠前を先づ第一に外したいつて氣持は誰にもある。頂上の岩に外の奴より先きに達したい氣持をもつてゐるやうに。歩きながら綱をほどく、ルツクサツクの片方の革は外してゐる。数分にして一行は小舎の前に立つた。

ビッケルで壁を敲く奴がある。ド／＼と鳴り響く。濡れた綱を地面へ抛り出す。入口のそばへビッケルを立てかけて、金屬製のケースの中へ滑り込む大きな外側の門を引くと、鉋金の錆びた外扉が重苦しくあく。内扉の錠前を外して、まづ上の方を押して開く、踴りてもう一つの門を外すと下の方もあく、足と手で押す扉は兩側へすつかり開く、小舎の内は眞暗闇で、心もち濕めツぱく、素っ氣ない木の香が閉ぢこめられてゐた空氣に滲みこんでゐる。手さぐりで近い窓を探す、鐵鉾を打つた靴が床で無氣味な音をたてる。窓をあけて鑑戸を開らいて押すと、光りが溢れるやうに流れこんでくる。ほかの窓も明け放された。見廻はすと、總てのものが整然と清潔におの／＼處を得てゐる。テーブルは凹んだ傷

やしみこんだ汚れと共に、腰掛けは銅のまるい黒焦げのあとと共に、ちいぢやいストローは曲つた足と共にある。つぎはぎした煙突、そのうしろには右にも左にも大きなトタン板にソース鍋や大匙が掛つてゐるし、ストーブの側には大バケツや大鍋や水桶が、壁の釘には斧や鉾が、隅っこには箆と薪入れがある。奥の方には十人分の寢床があつて、掛蒲團は丁寧にたんで敷き並べた蒲團の上に綱で吊つてゐる。ひとつの棚の上には鼠色の毛皮のついた木靴が数足、ケズ／＼になつた古本が數冊、山岳會誌の黄色いカバー、通俗文庫の青いカバー、雜誌からちぎつた白い紙、口の所に脂のついた空堀、振れた針金の燭臺、燃え残りの蠟燭、チヨコレットの空箱、汚れたトランプ、駒の足りないドミノなど。

救助綱は巻いて壁に懸つてゐる。非常時信號の表は藥品箱に貼つてゐるし、小舎使用規則は扉に留めてゐる。黒縁の鏡（歪んで寫つる）とひとつの窓との間には赤い點線をいれたジョグフリーットの地圖が貼られてゐる。野菜入れと向き合つて天井裏への梯子がたて掛けてゐる。天井の引戸は閉つてゐる。

兎に角總てのものが整然と清潔におの／＼處を得て、登山者を持ち佐びてゐたやうに居心地がいい。

二つの窓も入口の扉も明け放されて、小舎の中は光りに満ち、物音が蘇つてきた。疲れきつて、物も言はず、物も思はず、香中を丸くして腰をおろしてゐる。室内の冷めたさに顔は猶さらばるし、眼もまだお

しい。金色を叩ませた刷毛で部屋をふたつに裁つたやうな、微動だもしない日光の中で埃が舞ふ。

みんな急いでルツクサツクを空っぽにする。シャツを取換へて、寢床の上にめい／＼の場所を占領する。一番のエゴイストが——たいていの場合ひとり位はゐる——隅の蒲團を眞先きに占めるだらう、そんな風はちつとも見せないで「俺は一番隅つこにするよ」などと、何気なくつぶやきながらそこを占めてしまふのだ。外の連中も隅つこが欲しいのだけれど、別に何も言はないで黙つてこれを承認してしまふ。

ぼつ／＼みんなが口をひらく。小舎の構造や位地を褒める。それを建設したセクシオンを讃へる、疲れを忘れてみんな浮き／＼してくる。めい／＼が木靴を一足づつ、選ぶことになるんだが、まづ床の上へ全部抛り出してその内から取出すものだから左右揃つたに當ることは滅多にならぬ。片方は幅が狭くて痛いやうだと片方はとても大きくかつたりするが、不平を言つてはならない、乾いた履物をはけるのは幸福なのだから。またみんなそれで満足——最も大切なことだ——してゐる。

最も腰の軽い奴が水を取りに出掛ける。私はこの水汲役をよく買つて出る——別に腰の軽い譯ぢやない、いやどつちかと言へば反對の方なんだが——水の出てゐる所に腰をおろして一滴々々水筒の中に音をたて、水の滴るのを待つのは、寂しさを味つたり、とりとめのないことを想つたりするにいちばんいいから

だ。腰の軽い奴は渡された水桶を背負つて、柄杓を小脇に挟んでビツケルを手につけて、赤線を辿つて水の方へ行つてしまふ。襟札に曰く「水は小舎の上方二百米、第二のクロアルにあり」と。

この間に食料を整理する、シャムはシャム、マギスプはマギスプとみんなの持つてゐるのと一緒にする。シヨコラ、砂糖、茶、珈琲、パン、プラム、其他いろいろ、皆片付ける。さてストロープをとり回して、鍋を掛けるやうにして鍋を据える、ソース

銅をちよつと嗅いでみる。抽斗を開けると雖然と入つてゐる金屬製の食器類がガチャ／＼と音をたてる。食膳の用意だ。錫製の皿、鐵製の茶碗、ものはいいが、大分擦れた大きなテール、クロース、並みの硝子器。用意はできた。次ぎは薪の番だ。晩のために薪を割るんだ。残つた二人の内、いくらか働く方の奴が斧を取つて、小舎の前日向でパン／＼薪を割る。最後に残つた奴は——働きたいといふ素振りを一向にみせない——ジャケツを着込んで、懷中鏡の前で髪を面をしながら顔にクリームを塗りつけて、煙草に火をつけ、腰掛けの上に寝そべつて「旅行者必携」を繕いてゐる。これが眞先きに隅つこの蒲團を占領した奴である。と言ふまでもないが、明日は岩場で綱をむすばれさしたり、ためらつたりして登りを遅らせる人間なのだ。仕様のない奴だが、まあ缺點を償ふやうな美點も反面には持つてゐるのだ。(次號へつゞく)

山岳救難機關に就て

瀬木 三雄

登山が普及するにつれ、山で死ぬ人々も又増加する事は否めない。雪崩で死ぬ人があれば雪崩の研究が行はれる。凍死する人が出来れば凍死の対策が講ぜられる。然し夫れでも矢張り山は手な／＼、品な／＼人間の間隙をうかゞふ。優れた登山家の方々が山岳の危険を説かれる。誠に結構なことである。現在の日本の山岳界では山岳の危険に就いては可成り研究をされて居るし、説かれても居る様に思はれる。然し一旦遭難の物發した際、之に處する設備機關即ち山岳救難機關といふものに就ては未だ眞面目に考慮されて居ない。上高地を中心とし東京醫專の人々が極めて熱心に且つ犠牲的奉仕をされて居る事は感謝せねばならない、が何といつても、斯うした私達の診療所に殊に全く營利を離れての厚意の診療では、經濟的負擔が重く、現在以上で活動する行動を期待する事は無理であるし、又其の活動の範圍も自ら制限される事は止むを得ない。例へば日を同うして二個所で事件の起きた際等には全然面喰はざるを得ない。斯く考へ來るとき、私達は日本の山に適當なる公設救難機關の速に設置せん事を切に希望せざるを得ぬ。現在の東京醫專診療部より更に完備せる組織を有し、殊に其の活動に對し充分の經濟的根據を持つものであつて欲しい。勿論日本アルプス

のみにても其の隅々迄活動範圍、救護網の下に置く事は困難であらうから、比較的遭難者の多い立山附近並に槍穂高附近のみにても良い、且つ期間も四季を通じてといふ事はとても無理であるから一般登山者の最も多い七月中旬より八月中旬迄でもよい。急報一度來らば直ちに救護隊の繰り出せるステーションを適當なる山小屋内に設けて戴きたいものである。下界なれば直ぐ最寄りの病院へ搬送込んで生命に別状なしといふ程度の負傷でも、山なるが故に遂に手遅れとなる場合も少くないと思ふ。たとへ死に到らなくても、早期手當の遅延、不適當なる素人療治は治療経過を遷延せしめる事も考へられる。まるで未だ臨床の講義を聞いた事もなく、心臓の音を耳にした事も、外科の手術を一回も見た事もない醫科の初年學生が、山の中では急に醫者にたり、巾を利かす事實は山岳地に於ける醫療程度が遙に劣つて居る證據であり、考へ様によつてはかなり寒心す可き事である。斯かる際、告せられた小屋に一人の醫者の居る事は登山者に多大の安心と便宜を與へる事とならう。

救護隊の構成に就いて迄私が述べる事は潜越である。然し其の隊員の中一名は、若干の外科的經驗を持つ醫者である事が望ましいし、又遭難は快晴の日、通常の登山路で起きる事は寧ろ稀であり、救護隊は多くの場合暗夜急行の要があり、且つ現場に到着後、身心共に相當の餘裕を持つて居なければ、到底適切な應急手當は出来ない。之等の理由の爲め相當な登山經驗と強健な體を持つものでなければならぬ。一昨年夏私の友人が槍穂で負傷した時、東京醫專の長田醫師は降雨について槍穂小屋に急行、懇切なる手當をなした上に、更に翌日には燒岳登山の歸途、前穂北尾根に遭難の急報を受けて、再び夜を徹して潤澤へ走られた。此の長田醫師の涙ぐましい犠牲的努力には當時現場に居た私は痛く感激した。若し長田氏が單なる醫師であり經驗ある登山家でなかつたらば、到底斯うした藝は打てなかつたに違ひない。

救護隊を配置し、救護網を作る事は多大の費用が要るかもしれない。然し東京醫專一個の力であれだけの活動をして居るのを見れば、大した金額が必要とも思はれない。宣傳映画一本を作る費用で一年の活動が出来はしまいか。主體は何であつてもよい、日本山岳會なれば之に越した事はないが、鐵道省でも營林署でも縣當局でも何でも構はない、要は直接救護に當る人々が活動力に富み、人間としての豊かな犠牲的精神のある人であればよい。現在の東京醫專の人々がこの組織の中に加はれば、其の歴史と經驗から一層効果を期待し得る。

然し斯かる救護隊の設置が必ずしも早急に實現出来ないとしても、先づ第一手段として、山小屋に救護器具の設備をなす様取計られ度いと思ふ。遭難の度に小小屋のはめ板を剥がして櫓や擔架を作る事なき様、斯かる救護運搬道具並びに簡單なる醫療器具、藥品は然る可き局の方から

配給保管せしむるか、若くは規則を以て山小屋に常備せしめる様に仕度い。たとへ救援隊でなくとも、登山者中には醫師の居る事もある。然し醫者も素手では武器なき兵士に等しく全く動きがとれない。殊に外科的傷害に於いて然りである。

日本山岳會の小屋が潤澤に新設されると聞く。私は以上の點に留意され

研究欄

山地スキー術私見(上)

今西錦司

シテムボーゲンとステムテレマーク

スキー、スキーと近頃は録に雪も降らないのに、何と云ふ流行り方だ。暮の或る日、私は山へ入る友を見送るべく驛頭にあつた。そしてその列車のスキー客満載の物凄さに、私は憂鬱を感じ、私自身を顧みなければならなかつた。

今年は何處のスキー場へ行つても、ホッケ姿勢とシテムボーゲンとが、壓倒的優勢であるなどと、新聞には書きそやした。シテムボーゲンはかのスキー界の寵児、ハンネス・シュナイダーの來朝以來、急に賣り出した言葉の一つであるが、私にはそれは未だに、長い單杖を操つて、斜面に雄大な弧を描いて行く、リリエンフェルト派の回轉にのみ、獨專的に與へ得る名前でもあるかの様に思へてならない。

スキーの術派論になると、水野祥

れ、日本山岳界に範を示されん事を切に新しき小屋に希望仕度い。

外國の山には既にかなり完備した救援組織があり、救援費用の支拂ひに關する細則迄出来て居る様である日本の山にも、ぼつ／＼同じ考慮が拂はる可き時代が來たのではなからうか。

(終)

術を考へて見たい。

スキーが實際化し、それが目的の爲の手段として使用される場合も多々あらうが、その中でもその使用が、スポーツを目的とせるものに、競技と登山とがある事は申す迄もない、競技には記録が附隨する。だから或天才的ジャムパーが出現して、異彩を放つた姿勢を以つて、國際記録を破つたとすれば、他の多くのジャムパーは我も我もと、その姿勢を真似し、又それを研究するであらう。術派は目的ある處に初めて確立するのである。例へば走高跳には今尚、正面跳とロールオーバーの二大術派が、オリンピック毎に鎗を削つてゐる。

太郎氏に、お譲りしなければならぬが、一體この節激増したスキーヤーの、スキー場目指して、行進する處は、夏に海水浴場に蟻集する人達の心理と、大差なきもの、如く私は考へてゐる。その人達にとつては、愉快に銷夏する事が第一の目的であるのと同じ様に、スキー場を離れないスキーヤーにまで、スキーの術派なるものは、緊要なものではなからう、唯スキー場にゐるスキーの先生達は、何とか勿體らしい看板を掲げておいた方が得策だと云ふ事になる。

そこで大同小異の術派が簇立し、内容の一向變らぬ様なスキーの本が矢鱈に發行される。そんな事に餘り神経を失はしてゐると、その人は「理論スキー術」なんて云ふ飛んでもない方向に脱線をしてつたりする。それも悪い事とは云はぬが我々山へ登る者は、もう少し實際のスキー

の眼に浮んで來るのである。するとその處女雪にシュブールを印して、一人の山男が山を滑降して行く、そのテクニクが軽快なステツプタインであらうと、或はそれが稚拙なクリスチヤニア、アツプヒルとキツクタインの連續であらうと、それがその男の山に一致したリズムでさへあつて見れば又何を云はんや、私は今日迄單杖で押し通して來た田中喜左衛門氏の孤高なる姿に今更年々尊敬の念の新たなるを覺えるのである。術派は精神あつて初めてその生命を見出す。

前置きが長くなつたが、私が以下に説かんとする處は、かゝる意味で私のスキー術に立脚したものである。初めに斷らなかつたが、こゝで云ふシテムボーゲンは勿論シュナイダー即アルベルク派のそれであり、ステムテレマークはコールドの、前者は友人貞雄氏が親しくシユナイダーの元で學んで來た處を、最近笹ヶ峰で見せて貰つた。又後者は長友西堀榮三郎氏が數年來テレマークの愛用者として研究して來た處のものである。今之を比較し、その優劣を論ずるに際しては、素より山地に於けるその適應如何が重要視されるべきであるが、そこには又個人の體格の差、從つてその個性的な嗜好の相違と認めねばならぬと云ふ事を忘れない様にして貰ひたい。

シテムボーゲンとステムテレマークとが、ダウンヒルタインとして、兩制動の状態まで全然同一の動作をとる事は、別に圖示する迄もなく讀

者に明であらう。其後の動作に於いて、前者はスキーをそのまゝの狀態に置いて置いて、唯上體の動作によつて内スキーの體重を外スキーにかけ、之に依つてタインを完成しようとするのに反し、後者では兩制動の状態から所謂テレマーク膝なる姿勢に移行する事に依つてタインを完成しようとするのである。二つのタインとも事新しく書き立てるまでもなく、以前から知られ、又用ひられてゐたもので、何故私がこの二つのタインをこゝに持ち出したかと云へば、一見非常に相違してゐる如くして、これ程又よく似たタインは少いからである。

處でこの二つのタインの適用範圍は可成相違してゐると思はれるのである。シテムボーゲンは元來淺い、輕い雪の上で容易なタインであり、テレマークは反對に深い、抵抗のある雪の方が適してゐる。それ故シテムボーゲンを深い雪、重い雪で使はうとする事は、テレマークをツル／＼に横江りする雪の上で使ふのと同様に、その使用法を誤つてゐるものである。

シュナイダーがシテムボーゲンをやつたからと云つて、スキー場ではシテムボーゲンが流行するのは一向差支へない。スキー場など、云ふ處は必ず大勢の人がカン／＼に踏み固めておくから、このタインには好適と云へようから。しかし一歩スキー場の外に出れば、そこには濕つぱい、深い粉雪が待つてゐる。それが日本の冬の山の状態だ、山を歩く我々が長い間苦しんだのも、この抵抗

の多い冬の雪を如何なるターンでこなさうかと云ふ處にあつた。

シテムボーゲンも、ステムテレマークと兩制動の状態までは同じであるとは先に述べた。さて問題はこれからにある。シテムボーゲンは之から先が、外足體重のターンとなる。即片足のターンである。それは兩制動の状態以上には最早決して舵作用は働かないからである。然るに重い深い雪では、片足體重が不安定なる許りでなく、更に體重の抜けた内側のスキーの制御に多大の努力を要する。これはやつて見ればすぐわかる事だ。深い雪でこれらの缺點を補ふものがステムテレマークである。

尊重してゐる。従つてシャムプターンとか、ステップターンとか云つた様なものは、使はずに済ませればそれだけ結構なのだ。色々な雪質に應じ又斜面に應じて、こう云ふ考へ方からそれに適する様なターンを探し出す事が、私のこれ迄のスキー術に對する練習でもあつたのだ。それ故今此二つのターンを比較するに當つても、勿論シテムボーゲンのエキスパートなら、どんな重い深い雪に於てでも其得意とする所で廻るであらうが、私は唯體重を少し變へたりするよりも、其儘テレマーク膝になる方が樂であり、其儘舵作用によつて、スキーが獨りでに自分を運んでくれる方が、好ましいと思ふからシテムボーゲンよりもステムテレマークの方を使用するものである。

ハンネス、シユナイダーの故郷サン・アントンは恐らくテレマークなど使ふ程、雪が深くも、又重くもないのであらう。それともテレマークを採用しないのは、單にシユナイダーその人の、體格若くは嗜好の然らしめてある處かも知れない。私はシユナイダーがやるスキー術なら、何でも學んで之を日本の山に應用出来ると思はないし、又學ぶ價値あるものがあつても、今の私には到底それ丈の暇がかけられなかつたり或は今からでは望み難い様な派手な技術であつたりする。私は幸ひ今までに習得した私のスキー術を忘れない様に、それがどうせ時代遅れにならうとも私にはそれによつて私の山行が充分樂しめるものであらん事な願ふのである。

そこで私は、私の術派的見解から更に少し附け加へたい事がある。私は山を滑降する際、最も努力を少くし、又最もスキーに拘泥せずに行りたいのである。それは私の現在のスキーの技術から云つても出来るだけスキーをして廻るべく仕向けて、換言すれば自分は唯スキーに乗つて單にその手綱を取つてゐるに過ぎないが、その引き方の如何によつては、スキーは自分を乗せたまま、自分の欲する方向に廻つて行く、この際乗り手は落ちない様にさへしてゐればよいのだと云つた様なスキー術を最も

（次號に續く）

魔法瓶に就て

會報二二號所載魔法瓶に關して北大、農學部動物學教室、犬飼哲男氏より左の稿を寄せらる。

外側アルミニウム或は之と類似の輕金屬製によりて包み、胴の中央邊りで二つに分かれ、中の硝子の破れし時、此處の螺旋釘をゆるめて、取替へられる様になる魔法瓶は非常に丈夫にて、別に何等の保護裝置を講ずることなしに安心して携行出来るものなること、目下北大山岳部に於て盛んに使用せられて居ること、部員は三越札幌支店に於て購入、代價三圓五十錢位の由。

註 此テルモスは商標 (Tiger) と記入せられて、大いさがたしか二通り位ある。大型と小型と、アルヒニズム社の人々からも非常な好成績の由を聞く。(額田)

テルモスの破損防止に就て研究欄に問題が出たが、之に關してはテルモスをルツクサツクに携行する者の共通の悩みの種である。

先づ絶對的に安全なるテルモスがあるかどうか、破損の際に内部の取換へが容易であるかを考へてゐた。先年十四圓程出して外國製のテルモスを使用した事がある。絶對的に安全であるといふ話から安心して使用してゐたが、遂に一寸したはずみにやられてしまつた。

テルモスに對する魔法袋ともいふべきものを考へてゐる。空氣枕式のものでテルモスを包み、空氣を入れする方法は如何。未だ試みてないので

結果は不明ながら、提案する。

現在自分の使つてゐるテルモスは二合入九十錢の和製品である。一本十四圓もする貴重品を心配しながら負つてゐるよりは、十五個設しても舶來品一個に過ぎないといふ、氣易さで、國產主義をとつてゐる。さうして皮肉にも此の和製品は既に一年近くも酷使してゐるが、無事だ。

二月五日に大阪の藤木九三氏を訪れた時に集られた西岡、辻谷、中村、津田、中原の諸氏とテルモスに就て尋ねて見た。結局現在では絶體安全なるテルモスはないやうに思はれる。

多少の強弱の差はあるとしても、取扱ひの注意が必要であらう。ルツクの外側の袋に入れないで、スウェーターで包むとか、固いものと觸れ合はないやうに注意する事である。尙、此の問題に就てテルモス不携行説もあつた。即ち、爆彈をかくへて歩くよりは、安全な軍隊水筒にしかずといふ意見である。辻谷氏はカモシカの袋に入れた場合は相當の長時間温度は保ち得ると云はれてゐた。(角田)

研究欄は號を重ねる毎に、投稿が増して來た。尙ほ今後も研究問題の提出と意見の發表を願ひ度い。

「冬季雪中露營に際しての防寒具」に靴にて輪カンチキを履く時の締具」次號のため研究の發表を希望します。

磯貝勇氏より「コバに就いて」の原稿が到着してゐるが都合にて次號に掲載の豫定。

片足を儲ける!

崖だ! ヒヤーツと! と思つた瞬間に、僕の意識は半ば宙天に飛んでゐた。が、それでも不思議に大した怪我もなく、腰の打撲傷と、足首の軽い捻挫で済んだのは全く仕合せだつたよ。

すぐ友人たちが馳けつけて、宿へかき込んでくれる、サロメチールをつけて揉んでくれる、——お蔭でミア、不具



者にもならず済んだ。が、もしもあの時手當が遅れてゐたり、サロメチールがなかつたとすれば、今頃はツツきり松葉杖の御厄介だれ。

僕はサロの赤いチュウブに感謝するよ。

そこで、僕から一言、君の技術がいかに老練であるとしても、いづどんなことが突發するか分らない。スキー場へゆくならサロメチールだけは必ず餘分に持参する事。



圖書紹介

Alpine Journal Vol 44.

No. 246, Nov. 1932

巻頭二つの記事が特に重要に思はれる。

一は英國の北氷洋航空路探検を目的とするエクスペディションであつて、一九三〇年一二年に前後七回の南グリーンランドの探検であつた。著者は、リーダーとなつて活躍したウアトキンスで、彼れは三二年七月末此の記事をアングマサリクからAJに送つて間もなく八月末食糧にあざらしを狩る間、不幸にして此の地に二十五の短かい生涯を絶つたのであるが、彼れの書いた最後のものになつて了つた。

他は、クニークの獨米ヒマラヤンエクスペディションの紀文は、一九三二年のナンガパルバット登攀記で

彼れが歸路船中から寄せたもの、恐らく此の時の紀行としては最も早いものだらうが手ぎはよく纏まつてゐる。

四月末ゼノア出帆、五月二十三日スリナガルからナンガパルバットに向ひ、そのラキオット氷河を目指したが、途中七個のキャンプを設けながら、ラキオットピークの主稜上約二二六五〇呎に第七キャンプをはつたが(七月二十九日)天候の悪化によつて、新雪のためそれ以上に前進することができず、引上げたものである。然しそれから上は大した困難もないとの事だから、次ぎの機会には恐らく登頂は確實であらう。

季節の晩かつた事と、ゴーターな充分に驅使し得なかつた事が、主な敗因であつたと讀まれた。

寫眞はグリーンランドのによいのがあつた。他の記事は茲に紹介するのを止めよう。(TK生)

Akademischer Alpenclub,
Bern (A.A.C.B.)
26. Jahreszeitbericht
vom 1. November 1930
bis 31. October 1931.

最初に P. Schild の會務及び事業報告が出て來てゐる。それによると一九三〇年は丁度此の會の二十五週年に當るので Hotel Baren に於て祝賀會を催したとある。出席者七十五人、中には名譽會員 Montandon 瑞西山岳會よりは有名な Dr. H. Dittl が顔を出して居る。そして此の機会に彼も亦 Ehrenmitglied に推

薦せられた事も報告されてゐる。

主要記事は Otto Zimiker の "Erinnerungen an Hamo" である此の Hamo とは "The Berge" でお馴染みの Hans Morgenthaler の略稱である。前書きの所だけを御紹介して置く事にする。

「彼は少くとも自分では Unsterblich なりと考へて居たらしい。然し乍ら彼は永遠の價値を創造するには健康に於ても恵まれません、且つ餘りに短命であつた。彼の愛すべき處女出版 "The Berge" は今日でも人々の間に弘く讀まれてゐる。馬來やシヤム地方の熱帯地の情調描寫は "Malay huti" の中にあり、後に世に出た "Galassa Puti" は彼の最も快心の作とするものである。その自叙傳的小説 "Die Stadt" は吾人に訴へる所甚だ多いが比較的一部の人の間にしか讀まれて居ない様だ。又死の影に苦惱しつゝ、闘ひ続け、寂しくも此の世を去つて行つた或る人間の生涯に就て書かれた新聞連載小説も今では黄ばんだ新聞束と共に四散してしまつてゐる。而して樂觀悲觀、佳調不調の矛盾に満ちた彼の多くの詩片は "Tyrisches Testament eines Schwindsichtigen" となつて少數の友人の間に分けられてゐる。

前をば反抗と區別の精神から諧謔的な Hamo という略稱を使つて居た彼の鼓舞された不具の手から出る感動的な表現は體驗と苦惱に満ちた力強い言葉として病身と闘ひつゝ、ものした作品の詩や散文の何れにもよく顯はれてゐる。Hamo の文章の響く所人は宿命の奔騰を感ずるのである。彼の數少なき著作慌しくも投げかけられた其の大膽な告白の斷片は假令最後の仕上げに缺くる所ありとしても暗黒より光明へと突き入る内部的眞理は充分に認める事が出来る。彼は偉大なる高所に憧れ且つ夫れに達しやうと努力したが時は彼にとつて餘りにも短かつた。死の神は彼がペンを走らせてゐる間にもはや其の肩越しに彼を瞰下るし無慈悲にも彼の暗闇の世界へと逐ひやつて了つた考へ得べき最惡の條件の許、而かも次第に弱まり行く勞作の力の許に於ても其の本原的、而して又全く強力なる才能の本質的形態が現はれて居た。此の事實は各所に於て發表された短編の中でも解る事であるが殊に開示的物語り "Die Stadt" に於てよく證明される。其の中で最も人を感動せしめるものは Teidi に於けるカラストローフエを叙した章句である Hamo の著作と彼の眞の生活を一歩々々追隨して行く事が出来たならば必ずや人は常に其の中に於て彼の純一と非妥協性との自由なる調和を見つて驚嘆せずには居られないだらう。自己を特殊扱いに仕様とした性向、自己を飽く迄描記し又其の反對に何處迄も抑へ隠さうとした彼の人格といふものは今日尙興味ある問題ではあるが又非常に奇異な現象でもあるのである。兎な理由から彼人間 Hamo の神秘的謎を解く一つの資料として二三の個人的追憶を行つて見やうと思ふのである。

前書きは之で終つて次ぎに六項に渡つて其の印象を書いてゐるが餘り長くなるので茲では其の紹介は止めて置かう。他の部分は此處で改めて解説する程の事もないと思ふ。(吉澤一郎)

仙 第四號

日本醫科大學山岳部

昭和七年十二月發行

スキーの版畫は良い思ひ付きであるが、幾ら醫者の學校だからとて巻頭言に野糞譚はチト鼻持ちがならぬ。別に之と云つて取立て、いふ程の新記録も無い代りには部の人が良く萬遍なく歩いて居るのが眼に付く上田君の「農島小屋から鮎差まで」は RCC の西岡氏のものと比較研究するには、材料であらう。但し附圖があるとは云ふもの、簡單過ぎる嫌ひがある。研究欄にある福田君の「山岳映畫に關する一考察」は今まで纏まつたものが無かつただけに面白く讀んだ。こゝにいふ特志家の一人や二人はあつてもいいと思ふ。(吉澤)

RCC 報告 第五號

一九三二年十二月發行

定價 一圓五十錢

RCC 報告の装幀はいつもスマートで氣持がいい。然し今度の五號だけは怎う云つては濃厚な中村氏に濟まぬが「新興獨逸建築設計圖集」と云つた様な感じがするけれどどんなものだらう。

今度は藤木氏は詩を一つ出したゞけで納つて了つた。然し水野氏の書くものはいつも読み應へがして嬉しい。

細野氏の鈴鹿に關する自然と歴史は力作たるを失はぬ。中國から白山へかけて權威ある記事のあるのは場所柄いつもの事であるから何も云はねとして、關西の人が八ヶ岳で合宿をして居たこと岩登りの技術指導に關する報告は好個の参考である。關西の加藤氏のアラインゲージンもいよ／＼堂に入つて來た觀がある。西岡氏の「澤谷川」の續々編がある。之を要するに此の第五號も亦弘く讀まるべき充分の價值ある報告である事には疑ひない。(吉澤)

東大スキー山岳部報告

(1932年)

東大スキー山岳部としての始めての報告である。

装幀は大學ノートを思出させるものだが、あつさりしてゐて、近時流行のデコ／＼したのよりよい。

紀行としては前の小集會で發表された朝鮮外金剛の一つであるが、朝鮮に岩場を求めて出かける同部員の熱心さに敬服の外ない。

記録としては六ツの中槍穂高附近の積雪期及び夏期に於ける登攀記録がよくまとめられてゐる。夏期はともかくとして、十二月から五月まで二月を除いては毎月その部員中の誰かが槍穂高に入つてゐるのは實に頼もしく思はれた。

とにかく部報として新しく出たものとしては非常に要領よく簡潔に

出來てゐると思つた。

寫眞何れも問題ない。全部で八十一頁 定價五十錢 (黒田)

新版黒部、立山圖幅について

最近發行された陸地測量部五萬分一黒部、立山兩圖幅について少しく卑見を述べて見たい。

先づ第一に目についたのは、地名道路等の記入及び間違ひの訂正であつて、以前のものに比して遙かによくなつたことは論を俟たない。

それから、私共のやうに黒部、立山に深い興味を持つてゐる者にとつては、舊版まで舊版が二九八八米突、立山本峰が二九九二米突(これは勿論頂上より稍低く南に出てゐる峰につけられたものであるが)の標高が記されてあつたのが、新版には銀岳が三〇〇三米突、立山の太鼓峰が三〇一五米突と記入されてゐることは何と云つても愉快なことである。山の高さが變つた譯ではないが、兎に角槍ヶ岳以北の日本アルプスに、三千米突餘の記號が二つ入つたことは喜ばしいばかりでなく、立山は以前から定評があつたが、銀岳が三千米突以上に訂正されたことは、誠に愉快の限りである。これだけでも新版は意味深いものと私は思ふ。

次に私の眼にとまつた瑣事を述べて見やう。

先づ黒部圖幅から云へば、黒龍川源流の柳又谷で、ゼンマイ谷と誤記されてゐたのが水谷と訂正され、ゼンマイ谷が一つ上手のものになつたのはよいが、この水谷とゼンマイ谷とは全く別の支流で瘦根で落口が

分たれてゐるのに、舊圖幅では兩流相合して黒龍川へ入つてゐるやうに記せられてあつたし、新圖幅でもそれを訂正せずに舊のまゝになつてゐる。

それから北又谷の支流杉谷と云ふのが實はガラ谷で、杉谷はその支流であつて、こゝでは谷の入り方が大分違つてゐるやうだ。山へ登つて朝日岳からイブリ山を通じて北又谷へ下る小川温泉への歩道が、朝日岳の西方にある二〇九三米突(夕日ヶ原)の少し手前の二二〇〇米突の峰即ち前朝日の北方を迂回してゐる歩道が、反對に頂上から南方へ廻つてゐること、この附近は濃霧の場合非常に間違ひ易い處であるから、この歩道の入れ方は甚だ危険であると思ふ。

次に祖母谷について云ふと、その中央の流である中ノ谷と云ふ名が抹消され、清水谷が本流のやうになつてしまつたことで、私は中ノ谷を下つたが、清水谷のやうな大きな谷が左岸から入つて來たのを覺えてゐない。清水谷方面の水は硫黄澤へ流れるのではないかと今でも思つてゐる。然し私の通つたのは明治四十三年であつて、この谷のことについては今日適確の記憶をもつてゐないから疑を存しておく。

夜澤が硫黄澤に直つたのは結構であるが、それより大きな誤りを一つ加へたことを遺憾に思ふ。それは前の圖幅には西ノ谷が落ち合つてから硫黄澤が入つてゐたのを、今度のものは、どう間違つてか、硫黄澤の落口より下流に西ノ谷の出合をもつて

來てしまつたことだ。祖母谷は西ノ谷の出合附近から下流硫黄澤の落口までが最も立派な處で、所謂セトを成し流れは狭く奔流し、花崗岩の岩石の美しい處だと覺えてゐる。これは確言出來ると自分で思へるものだ。

それから立山圖幅に入つて見る。舊版では仙人谷落口附近の本流の大きな曲折を逸してゐたのが、新版には立派に書き入れられてゐる。東谷落口に温泉の記號が入れられた序に、更に温泉量の多い、廣い地域に涉つてゐる阿曾原にも温泉のマークが欲しかつた。

十字峽の喰ひ違ひが訂正されてグロツスになつたことも嬉しいが、その上流二十數丁の白龍溪の處で、黒部本流が狀に近い曲折をもつてゐるのが圖上に現はれてゐない。この附近は十字峽と共に地形上非常に重大な處である。

新越乗越、岩小屋澤等の水を集めて黒部へ入る新越澤(岩小屋澤)に名を入れて欲しい、然もこの谷の落口の瀑布は十字峽や東谷の物より遙かに高く壯大である、こゝも瀧の符號が欲しい。反對に内蔵の助平の方からくる内蔵の助谷に瀧の記號があるが、あれは記號を入れる程のものではなく、寧ろ一つ上流の御前谷にある黒部でさへ稀に見る壯大な御前の瀧の處へ記號が必要だと思ふ。内蔵の助谷も御前谷も名が入つてゐないが、共に立山東面から出る支流の中で御山谷や中ノ谷に劣らない程のものであるから次の版には是非名を入れて欲しい。

口の前に相當の溝が入つてゐるが、あれは間違ひで、そこは百米突以上の立壁になつてゐる、そして二丁程で本流が左折した下手から入る、私等の云ふ鳴澤小澤がこの溝にあたるのだと思ふ。

黒部別山の南の峰に丸山と記入されてゐるが、丸山と云ふのは内蔵の助谷を狭んで黒部別山と相對してゐる三つの圓頂を連れた二千米前後の山のことを云ふてゐるのである。

少し上の方へ飛ぶが、仙人山の尾根へ仙人の池の名が入れられたのはよい、然し池の平山の名は、小窓谷の西の山即ち小窓の頭ではなく、反對側の大窓の頭につけべきではないか。池の平は小窓谷の東側にあつて、その頭にあたるものは小窓の頭ではなく大窓の頭(即ち池の平山)であるからである。この邊は舊版でも種々誤記があつた處であるから再考を煩したい。

以上瞥見して氣着いた點を挙げて大方の參考に供する(冠)

山岳寫眞集

「高山深谷」

曾つて本會の編輯發行した寫眞帳「高山深谷」を復活して、現代日本の新しい代表的な山岳寫眞帳を作るために目下寫眞の收集中であります。締切が迫りました。三月十日迄に大いに會心の作品を貸與あらむことを希望します。寫眞はなるべく撮影要項を詳しく記入され、滑面印畫紙のこと。

發送先は當事務所「高山深谷」一係のこと。



山の消息

學生有志晩餐會

山岳會ルームで時折顔を合せて居た學生の會員の間から學生を中心とした懇親會のやうなものがあつてもいいと云ふ發議が持ち上がった。之れには種々の方面の人を含む日本山岳會の中でも比較的色彩を同じうする若い者が集つたら面白い會合が出るだらうと云ふ事。又東都の登山者中で現在比較的活動し得、又事實活動してゐる者には若い自由な學生が多いからその人達が親しく集る事は日本山岳會にとつても若々しい空氣を導き入れる事にならうと考へられる事。又之等若い人達にとつては創立當時からずっと活動せられて居る古い時代の方々の氣分を直接受ける機會が殆んどないから一夕晩餐を共にして親しく話の出来る時が偶にはあつてもいいだらうと云ふ事等がその根柢をなしてゐる氣持ちであつた。その意味で學生有志晩餐會は學生の會員を中心に東京の一般學生有志及び先輩、更に第一回として小島楨、高野、木暮の諸氏をお招きして

全く懇談を目的とする會として催すはこびになつた。

十二月十五日、會場は新宿の白十字、定刻の六時には出席を豫定された方々が九分通り参集されたので楨氏、高野氏を中心に着席した。席は世話に當つた幹事が正直に六十人と云つて置いたので、白十字ではいつもの如く人数にかけ値があるものと考へて控へ目にテーブルを作つたため、一同着席して見ると甚だ窮屈なものとなつたのは多少遺憾であつた。會員田口君の開會の辭の後直ちに晩餐に移る。料理は學生向きのものであつた。その中小島氏も見えた。やがてデザートコースに入るや、司會者會員中屋君の指名に依り、小島高野、木暮、楨氏の長老のテーブルスピーカー、先輩諸氏、學生の順に自己紹介、感想を述べられた。其の後小島氏が日本の山岳界の初期に於ける熱心な若い山好きとしてウエストマンさんの紹介でブライズ岬を訪問された時の思ひ出話を述べられて、満場聞き入つた。

形式とか、見方とか、小うるさい事から全く離れて、山への若々しい熱情は時代の隔りを超えて、やはり同一なものを感じさせられるのであつた。若い者中心の此の會に若き日を語られた小島氏のお話は誠にふさはしく又興味深いものであつた。斯くして九時過ぎ、和やかな空氣の中に會員小川君の閉會の辭に依り散會した。

當日の會場は席の狭かつた事。他の會の騒音が混入する事等の氣分を悪くする事があつたため多少遺憾であつた。斯かる會には、出来れば何ゆつくり懇談し得るやうな別室が欲しかつた。然かし斯く多數の出席があつて小島氏のお話を始め色々興味ある話があり盛會であつた事は第一回としては嬉しい。

此の會がどんな色彩を持つて行くかは、之から續けられて行くに従つて生ずる空氣が決めて行く事であらうが、兎に角一年に一度でも懇親を目的とする斯かる社交的な會合を持つ事は、となく獨立的に小さく固つてしまひ易い若い人々に廣い展望を與へるためにもいいだらう。時期其の他の關係上先頃解散になつた關東學生登山聯盟との關係が云々される事は甚だ迷惑であり、此の會は全く懇親の目的以外に目的はないと幹事の注意された事は特に注目すべき事であつた。當日は全く懇親の目的で懇親に始まり懇親に終つた氣持ち良い一タであつた。(二五九三・二一(T.O.記))

當日の出席者左の如し。

小島久太 楨有恒 高野鷹藏 木暮理太郎 浦松佐美太郎 田中菅雄 渡邊漸 角田吉夫 額田敏本郷常幸 吉澤一郎 鹿野忠雄 黒田孝雄 磯野計蔵 中屋健式 田口一郎 増田鐵雄 櫻井稔 渡邊彌三 三枝守雄 石澤五男 鈴木恒 小川登喜男 平尾公平 松島一郎 渡邊兵力 堀岡清 湯淺巖 齋藤貞一 今井友之助 島田武時 池野信一 増山清太郎 鷺尾英治 桐生次郎 岡本敏 堀田彌一 金山淳二 山崎武士 吉田竹志 橋本正夫 如隆 加賀谷

第五十八回小集會記事

二月二日午後六時より赤坂溜池三會堂に於て左記の通り講演及び小型映畫(九ミリ半)が開催せられた。

秩父と其山村

原 全教氏

秩父の山と谷に非常な熱情と執着をもつた、原氏は、主眼は勿論地圖上には現れてゐないやうな小さな尾根小澤に至るまで克明に歩かれてゐるので、その蘊蓄の一端を講演して戴いた次第である。

其要旨は、秩父山塊が古くから人文に深い交渉をもち、夫れだけに數多くの口碑傳説を蔵し、その山村の人情が未だに意外な程醇朴であること、そして此の純真な人情美を透して觀た秩父こそ最も美しい秩父の風景であらう。彼の幽玄な黒木に蔽はれた森林美や溪谷美も勿論秩父の景趣を構成する要素には違ひないが、之れだけでは到底秩父の美を考へることは出来ないことを強調せられ、秩父山村の人情美を激賞され、奥多摩仙人谷の小屋に於ける大蛇一蛋一人の間に起つたグロテスクな事件。和名倉山を繞る瀧川谷や大洞川に笛吹川水源の東澤や西澤にも劣らぬ悪場のあること、尙そこに懸る瀑或は

深淵に残る山人遭難の遺跡や三峰神社の御眷屬(狐)の話、而かも夫れが馬の様に大きかつたこと其他多くの傳説奇談は泉の如くいつ盡くるともみえなかつたが、時間が無く中止せられたのは残念かつた。尙氏は昨年修正された秩父地方陸訓五萬の地圖に多くの林道が補入されたが場所依て非常に誤りがあることを指摘された、孰れ之等に就ては他日詳しく發表して戴く積りであるが。

山の映畫(九ミリ半)

會員 塚本閑治氏近作

塚本さんの映畫夫れは山へ行く人々にとつて大きな魅力であらう。之れは一度でも氏の作品に接した人の等しく叫ぶ所である。昨年二月の小集會で映して戴いてから恰度一年其の間随分多くの作品があると聞いては我慢が仕切れず、厚くましくも御無理を希つた譯で洵に御氣の毒に堪えない。

氏は映畫に先き立ち略圖に依て解説して下さつたが非常に有難かつた殊に今年一月日光菅沼に於けるアイデンク氏夫妻の遭難事件は偶然氏が湯本滞在中の出来事である搜索隊のリーダーとして活躍されたので、詳しく真相を知ることが出来た。

先づ映寫順に従て記せば、五月の富士山……(巻(七年五月作))山麓は既に水の滴れるやうな新緑、目も醒めるばかりの富士櫻の瞭然と透して仰ぐ崇高なる銀嶺、山頂の素晴らしい展望、舊火口壁に垂れ下がる大水柱、八合目邊りからの壯快な直滑降は息詰るやうな感激を覺えた。上越國境の雪……(二卷(七年五月作))

笠ヶ岳―蓬峠―大源太―仙ノ倉三國峠に到る晩春のスキー登山・新雪の苗場山……一巻(七年十二月作)新雪に蔽はれた針葉樹林の美、懐かしい山小屋に立つ煙、廣大な山頂・一月の奥日光……一巻(封切)之れこそは前述管沼に起つた悲劇で當時の状況が餘りにもまざりと銀幕に映し出されて、見る者をしめて暗然たらしめたことは撮影に編輯に居人ならでは出来ない心づかいがよく現れてゐて観る人々に良い感じを與へた。

當夜は來會者百十數名に及び近來稀れに見る盛會であつた事は感謝に堪えない。右の外會場には潤澤池ノ平に建設せらるべき山小屋の模型、寫眞、設計圖等陳列せられた。尙ほ角田氏から其解説をする豫定であつたが時間不足のため次回に譲ることにした事は遺憾であつた。(司會者神谷)

第五八回小集會出席者

磯貝藤太郎、吉澤一郎、加藤泰安、高橋康彦、飯塚篤之助、安田登茂次、山口清秀、交野武一、櫻井信雄、中村太郎、岩崎京二郎、飛川維之、坂江善治、小林義正、島田翼、山村孝三、矢島幸助、伊藤一郎、村井榮一、原田恭雄、塚本蘭治、鹿野忠雄、吉田竹志、住廣造、田中正男、村越匡次、高頭仁兵衛、加藤保二、木村久太郎、中村貞治、本多友司、多賀富藏、木暮理太郎、吉田次男、田中菅雄、額田敏、野口末延、星野光之助、武田久吉、濃信、井上良則、木村一男、戸塚武彦、横有恒、山崎金次郎、山根雅男、角田吉夫、伊藤秀五郎、小竹弘、長島春雄、松方三郎、小平

梨、黒田孝雄、吉田直吉、伊藤朝太郎、櫻内敏雄、澤智子、斯波悌一郎、箕川一、宮地貞顯、澤井徳太郎、茨木猪之吉、神谷恭、松本善二、外に會員外五十一人
合計一五一人

スクラツプより

寶鏡岳に山小屋

赤穂山岳會は中央アルプス寶鏡岳千疊敷カールへ小屋建設の計畫を樹つ。四季兼用のもの(一、一〇讀賣)

上高地山岳ホテル

問題のホテルは設計圖と共に、十六日詳細發表さる。純洋風三階建て、建坪八一坪、収容八〇人、經營は帝國ホテルに委託するものにて宿泊料は一泊七圓、五圓、三圓、食料朝七〇錢、晝一圓、夜一圓五〇錢、着工は四月、七月中旬完成の豫定。

傳書鳩と北アルプス

松本測候所にて十四羽の傳書鳩を育成し、山の通信聯絡を計る(讀賣)(註、此の計畫が進展して、各山小舎主が利用するやうになれば非常に有効である。現在大槍小屋の穂刈氏は熱心に訓練してゐる)

白嶺山の遺跡

一月十四日新潟縣東蒲原郡諏訪峠中腹に於て凍死者あり、新潟市西大畑町當時古町七の深津靴店々員竹石謙次郎(二二)と判明(中外)

蔵王山の遺跡

「山谷の放浪者」の著者(大正十二年八月發行)柏源一郎氏(三八)宮城縣峨々温泉を一月十七日朝出發、蔵王を越えて高湯に行く途中行方不明

となる。同行者なし。(國民)

柏氏の搜索は吹雪のため發見出來ず、三十日搜索を打ち切り、雪解けを待つ事に決定(中外)註、此の遺跡に就て實地調査せる額田敏氏の聞き書きあり、山岳に發表の豫定。

登山團體調査追加

- ▲山形山岳聯盟 a 山形市香澄町櫻小路一三六 b 篠田理策 c 昭和七年 d 二〇〇
- ▲東京アマチュアスキー俱樂部 a 神田小川町美津濃ビル内 b 村松巖 c 昭和二年 d 一六五 e 雪(月刊)
- ▲旅の趣味會 a 大森區馬込町東二ノ一〇九九 b 伊藤喜久男 c 昭和三年 d 八三 e 旅の趣味(月刊)
- ▲麻布山岳會 a 麻布笄町一七六 b 増田貞次郎 c 昭和七年 d 一六 e やまなみ(月刊)
- ▲アノ山會 a 日本橋區藥研町四五 b 石橋忠三 c 昭和五年 d 一二
- ▲杖突クラブ a 神田三崎町東京齒科醫專附屬病院内 b 河邊清治 c 昭和七年 d 一四
- ▲東京めげえ山岳會 a 淺草區千束町二ノ二九一 b 小松信也 c 昭和四年 d 五四 e T M M C ニュース
- ▲やまぢ會 a 芝田村町二ノ八樓二館内東邦商會内 b 渡邊峰夫 c 昭和六年 d 二〇 e 山の歩み
- ▲ラテルネ俱樂部 a 神田表神保町三構原方 b 田中正男 c 昭和二年 d 七
- ▲Y M C A ハイキングクラブ a 神田區美土代町東京基督教青年會内 c 大正九年
- ▲山と溪の會 a 川崎市東二ノ十一

d 波多野廣一 c 昭和五年 d 四二 e 山と溪(月刊)

▲奈良山岳會 a 奈良縣生駒郡々山町矢田 b 佐谷良造 c 昭和八年 d 四〇 e 山上(季刊)

(月刊)

- ▲大連あるかう會 a 大連市龍登町八 b 佐賀七郎 c 大正十年 d 五三
- ▲飛驒山岳會 a 高山町 b 直井佐兵衛 c 大正十二年 d 一五三
- ▲諏訪山岳會 a 上諏訪町 b 立木茂 c 大正十四年 d 九〇
- ▲福島不忘山岳スキークラブ 創立昭和八年二月一日、事務所福島市本町三好繪葉書店、會員五三名、顧問一五名、事業山岳スキーの研究吾妻山への夏冬を通じての山案内を依頼によりて行ふ。
- ▲福島山岳スキークラブ 會員八〇〇名、事務所福島保線區内、幹事長齋藤陽吾
- ▲遠刈田山案内 佐藤雪之助(57?) 蔵王山の夏冬を通じての山案内、スキー不能、日常相談の上決定す。
- ▲東京高等師範學校附屬中學校桐蔭會山岳部 代表山本幸雄 創立明治四十五年 部員五〇名「旅」年一回發行。

山小舎通信

▲蓼科高原宿舎 蓼科警務署番小舎の北五丁、佐久街道筋 昭和四年建設 収容約百名(但七月中旬乃至八月上旬當校使用)冬期使用可能(但防寒具の備なし)所屬東京市小石川區、東京高等師範

學校附屬中學校桐蔭會、照會先信州北佐久郡芦田村役場。

利根川湯ノ花温泉小屋 昨年の夏 この小屋は新築され、面目を一新したもので、今冬は小屋番が通し滞在してゐる。米味噌も相當に貯藏されてゐる由。積雪期の利根川上流の山、平ヶ岳や小澤岳を目指すには重要な根據地となる事であらう。

陸地測量部新刊地圖

- 五萬分一地形圖修正
- 仙臺 六號 藥 萊 山
- 福島 九號 關 吾 妻 山
- 日光 十四號 燧 須 野 原 山
- 同 十三號 燧 須 野 原 山
- 東京 十六號 秦 須 野 原 山
- 甲府 十號 韭 崎 野 原 山
- 同 十三號 高 遠 崎 野 原 山
- 金澤 七號 白 津 子 津 山
- 村上 四號 平 ノ 津 子 津 山
- 高山 十一號 船 津 子 津 山
- 五萬分一地形圖鐵道補入
- 旭川 一號 石狩留邊志部
- 同 六號 當 麻 山
- 帶廣 九號 茅 湯 山
- 同 十三號 然 別 湯 山
- 盛岡 十一號 早 池 峰 山
- 新庄 九號 淺 舞 山

(昭和八年一月三十日)

會員章をおつけ下さい



會員通信

乗鞍と霧ヶ峰

去る十二月三十一日荆妻と共に乗鞍岳に入り冷泉小屋にて神戸商大山岳部員と共に越年、一月二日稀なる好天氣を得て登頂大觀を満喫仕り候位ヶ原より肩小屋をへす直接頂上に達する谷は二本あり、我々は右を、友人一部は左を選び候が共にスキーに適し候、途中スキーデボを定めシエタイクアイゼンを用ひ候、ヒツケルは不要、恐らく如何なる時期にも不要と存せられ候、乗鞍は全山グレンデと申すべく、冷泉小屋を中心として二三時間にて達する二千七八百米の大雪原展開し稍單調の趣はあるも雪質の良さと入山の便等實に意想外のスキー山と存じ候、四日下山、五日霧ヶ峰に登り四方の望遠をたのしみ新設のヒュッテ霧ヶ峰に一泊いたし候、長尾宏一氏の計畫にて儘かに特色ある好ヒュッテに候、床を少し高く作らば更に住心地よからんと存ぜられ候、夏はゴルフリングの宿となり近々自動車もヒュッテまで登る様になり電燈も来る由、クライダーの計畫もありとか、將來すこぶるハイカラなスキー場と相成るべく候

一月六日上諏訪にて 田中 薫

一月淺間スキー登山

拜啓 躍進せる會報拜見仕り面白く讀了致し候、去る一月二十九日、日曜に信濃追分より淺間山に登り候二十九日午前六時二十分信濃追分驛下車、追分の宿より五、六丁にてスキーを履き、血の瀧九時、替林署造林小屋(人居らず)にて朝食、スキーデボは二四九三、四米三角點の直下標高二五〇米邊、前掛山の肩十二時四十分、此の處寒風強く時計止る。二五四二米、午後一時頃登頂下降にはスキーデボ一時半頃、三時血の瀧、四時半追分驛積雪状態は、血の瀧附近三尺、之より二二〇米迄は所々に岩塊露出するも概ね雪質良好、銚子口より南下する澤状窪地は二三〇米邊まで雪質良好、前掛山の西面は風強く、且つ山體溫暖の爲め積雪なく、輪カシも利かず、アイゼンにても崩滑して、てこすり候噴煙は西側より盛んに噴出、火口にて他の一人の登山者の足跡火口の所にて引返せるを認めたり。火口壁の内外は水蒸氣と亞硫酸ガスにて美しき霧氷岩面に生じ居れり。寫眞器のレリーズ、油凍りて利かず残念なり。淺間の雪は降雪後日を経るに従ひ悪質と變ずるらしく一七〇〇米—二一〇〇米間は雨に影響され、サンクラストとウインドクラストとの交錯斜面にて登行は容易なるもスキー滑降には面白からず候

二四九三、四米三角點東方南正面の領附近は若氷凍結を珍らしく觀察申候(八、一、三二) 小池 文雄

圖書室だより

▽一九三二年度に於ける圖書室訪問者数は總計一二六名に達した。これを會員、會員外につき月別に見ると

會員	會員外
一月 四六	一
二月 八五	九
三月 七七	八
四月 六七	八
五月 九七	一〇
六月 一〇九	二六
七月 七七	二五
八月 七七	七
九月 九五	一五
十月 一〇四	九
十一月 一一四	三七
十二月 一〇一	二二
小計 一、〇四九	一七七
計 一、二二六	

といふ結果となる。

訪問者は夜の部が壓倒的であるから、一週三日間を開室日と見なせば一年の開室日は一七一だ。だから一日平均七人はルームに来てゐる計算になるが、しかし来る人の顔と数とは一定してゐる。會に用のある者が大部分である。會員の利用はまだ〳〵と考へられる。珍らしく見える方々はお顔はいつも拜見して居り乍ら、御名を失念してゐる事が多い。それは山やスキーの場合と同じやうな場合が多い。どうかして、こんな方にもフアミリーア一になつて頂きたいと考へてゐます。洋書の方も松方氏の寄贈や、三田氏の御好意によつて大分本も増加し

ました。近い内に洋書の目録でも作成して見る考へです。

和書も、會報で御覽の通り、追々内容を充實し、本棚もおかげで手狭くなつて來ました。

整理は大分進みましたからどうぞお暇の折御來室下さい。開室日は次

く如くです。

夜間 月、水、金 午後五時—九時
日間 火、木、土 午後一時—五時
祭日 日曜、及第二木曜閉室

圖書係

山日記について

本年も山日記を出します。ついでに新設の山小屋、案内組合についてどしどし御通信下さるやう、會員諸兄にお願ひ致す次第です。

山日記編輯係

會員現在數

會員總數(昭和六、一、一三〇現在)

新入會員(昭和七年中)

合計

内 死亡

退會

其他(會費未納其他)

(昭七、二二、三一現在)

差引現在會員數

七二二

會務報告

二月九日定例理事會

(出席) 小島、高頭、木暮、冠、

島山、横、茨木、角田、神谷、

松本、福島、黒田、松井

一、「山岳」第二十八年第一號報告

約一五〇頁

二、「高山深谷」最近に委員集合の上

具體案作成の筈。

三、會計報告 島山氏より事務引繼

の報告あり。

四、廣告の件「山岳」並に「會報」の廣

告を營業者に依頼に決す。

五、「山小屋」に關する報告 山小屋

委員會の報告あり。尙近日横、角

田現地調査に赴く豫定。

會費

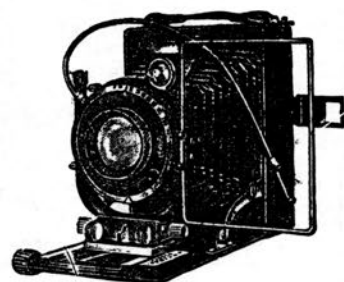
二月末日までに可成振替爲替にて御拂込み願ひます。尙本年度は三月より集金郵便制を採ることゝなりました御了承願ひます。

退會者

昭和八年一月二十八日付



山 (二月號) 日本アルカウ會 管見録 (二月號) 横濱山岳會 旅行 (二月號) 大阪管見社 ベテスマリヤン (第一四七號) 登山 (一、二月號) 關西徒步會 峠 (第一〇五號) 武藏山岳會 黒木立 (第八三號) 關東山岳會 山幸 (第一七、一八號) 阪神山岳會 山行案内 (二月號) 昭和マウンテンクラブ やまなみ (第一號) 麻布山岳會 みなかみ會々報 (二月號) 明峰山岳會々報 (二月號) 東京山岳會々報 (二月號) 廣島山岳會々報 (二月號) がくれい會々報 (二月號) 東京登歩溪流會々報 (第二號) 臺灣山岳會報 (第一號) リネック・サンククラフ部報 (二月號) 日本登高會々報 (第一七號) 法政工業山岳部々報 (第一號) 登山記録 (一九三二、一、二) 山校會 シリーズ (第二號) シヤンペン・シリーズ・トウロー 神戸アルカウ會々報 (三十一號) 長谷川傳次郎著 ロイヤルの旅 The Mountaineer Vol. XXV. No. 2 Jan. 1933 中央公論社 Bulletin, Appalachian Mountain Club Vol. XXVI No. 4 Jan. 1933 Club Alpino Italiano Vol. LI No. 11 Nov. 1932 Unione Ligure Escursionisti, Anno	19 No. 12 Dec. 1932 Planinski Vestnik Slov. 1 Leto 1- 933 Mountaineering Journal Vol. 2 No. 1 Dec. 1932 Die Alpen, Vol. VII No. 12 Dec. 1932 The Geographical Journal, Vol. L- XXX No. 6 Dec. 1932 La Montagne, No. 244 Dec. 1932 購入圖書 鈴木牧之著北越雪譜 初編及二編 不二山道知留邊一卷 甲斐國誌 上下二卷 吉田東伍著「大日本地名辭書」五冊 クマノエ 探險實記 一冊 W. T. Kirkpatrick :- Alpine Days And Nights. 1932 A. E. Field and Sydney Spencer :- Peaks, Passes and Glaciers by Members of The Alpine Club. 1932 Burrud and Hayden, A Sketch of the Geography and the Geology of the Himalayan Mountains and Ti- bet Himalayan Journal vol. 1/3 Weston, The Japanese Alps Hooker, Himalayan Journals Workman, In the Ice World of Himalaya. Wilson, The Abode of Snow Alpine Journal, 2 vols 會員密贈圖書 字井縫藏著「紀州植物誌」 旅行登山新聞 一綴 以上 田中正男氏	Abate Achille Ratti :- Climbs on Alpine Peaks. 1923. 以上 黒田孝雄氏 Coolidge, The Central Alps of the Dauphiny Valloir, L'Aiguille Verte Lunn, Skiing for Beginners Mont-Blanc-Fuehrer Wagner, Stubaier u. Oetzaler Al- pen Kurz, Guide de la Chaîne du Mont- Blanc Gaillard, Les Alpes du Dauphiné Muenchener Kletterführer A concise Guide to Map Projection Lunn, Switzerland Tauber, Die Berner Hochalpen Lunn, Alpine Skiing Valloir, Les Aiguilles de Chamonix Ausbildungsvorschritt f. d. Gebirgs- ruppen, Heft 1 Alpine Technik Valloir, Chamonix-Mont-Blanc Anneler, Kleines Loetschenbuch Fordham, Maps, their History Fancé, der Kampf mit dem Berge Fellenberg, Der Lauf der Berge Kurz, Ski-Fuehrer durch d. Wall- ser Alpen, in 2 Bde Hoof, Among the Karakoram Gla- ciers Fischer, Hochgebirgswanderungen, in 2 Bdn Collet, Geology of the Swiss Alps Gos, Pres des Neiges et des Glaciers Conway, The Alps from End to End S. A. C. Die Clubhuetten Schmithaus, Die Alpen	E. Singleton, Switzerland Lehner, Eroberung der Alpen Lattimore, High Tartary Mathews, Aruins of Mont Blanc Forbes, Travels through the Alps Canadian Ski Annals. 百富士 四卷(河村眠雲) 廣田戸七郎 スキー・シヤンペン 熊澤外五名 登山とシヤンペン 登山ガイドブック(金星堂) 國際觀光委員會山の座談會記 同 第二回山の座談會 中亞細亞紀事 上下 以上 會員 松方三郎氏	編輯後記 二月號會報には、一月より毎號連 續記載されるべき今西氏の山岳講話 を紙面の都合上已むなく刻愛し次號 より連載する豫定である。 本號は山小屋號として發行する事 になつて居たが都合により變更し、 詳細は追つて直接會員に報告する筈 である。 私(一月から全然未経験な編輯係 を命ぜられ、甚だ面倒な事に驚いた。 然し出来る限り努力するつもりであ る。成るべく會員各位より會報の原 稿などしつと御送り下さる事を御 願ひする。(額田) 昭和八年二月二十四日印刷 昭和八年二月二十五日發行 發行所 日本山岳會 編輯印刷人 額田 敏 東京市芝區榮町二 不二屋ビル 發行所 日本山岳會 廣告一手取扱 通 恒 社 電話四谷五六一番 (折刷印社交和)
--	---	--	---	---



大 名 刺 判
手 札 判

◇呈進グロタカ◇

内外製寫眞器を
通じ比類なき廉
價なる高級品

六櫻社製

リリーカメラ

F六・三レンズ附
六十八圓より

小西六商店

東京室町三

ウイント・ヤッケ

¥ 11.00 (舶來布地)

¥ 7.50 (亞麻薄地)

¥ 4.50 (普通防水布)



キスリング型 ルックサック

¥ 6.50.....¥ 12.00

スキー用小型 ルックサック

¥ 2.50.....¥ 6.50



羽根入 シラーフ サック

¥ 35.00

(舶來布地製)

¥ 28.00

(亞麻薄地製)



ゾームシール ¥ 8.00

シール (普通式) ¥ 3.00.....¥ 6.00

片桐テント登山具店

片桐盛之助

東京神田區今川小路二ノ四(神保ビル)

012



冬はボクの季節よ

スキーにチョコ
レートですって？
チョコレートが
何よりもスキー
ではありません？

トーレコヨチ永森